

☆四旬節第4主日(3月22日)の聖書朗読☆ ※主任司祭からのコメントがあります。

第1朗読(サムエル記上 16・1、6～7、10～13 節)

主はサムエルに言われた。「角に油を満たして出かけなさい。あなたをベツレヘムのエツサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした。」

彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」

エツサイは七人の息子にサムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」サムエルはエツサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけですか。」「末の子が残っていますが、今、羊の番をしています」とエツサイが答えると、サムエルは言った。「人をやって、彼を連れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きません。」エツサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」サムエルは油の入った角を取り出し、兄弟たちの中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった。

第2朗読(エフェソの信徒への手紙 5章 8～14 節)

あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。一光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。一何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。彼らがひそかに行っているのは、口にすることも恥ずかしいことなのです。しかし、すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。明らかにされるものはみな、光となるのです。それで、こう言われています。

「眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」

福音朗読(ヨハネによる福音書 9章 1～41 節)

そのとき、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。そして、「シロアム—『遣わされた者』—という意味—の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。近所の人々や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。

人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」ファリサイ派の人々の中には、「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。

彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。

イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずいた。

足立教会のホームページをご覧の皆様へ(主任司祭より)

こんにちは。主任神父の野口です。新しい感染症の拡大防止のために、現在は主日のミサを行っていませんので、少なくとも、日曜日のミサではどのような聖書が紹介されているのかを少しでも皆様と分かち合いたく、ホームページで紹介することにいたしました。お役に立てれば幸いです。

第一朗読 「サムエル記」

ここでは「ダビデ王の召し出し」が取り上げられています。その中で神は預言者を通して「人は眼に映ること見るが、主は心によってみる」と言われています。人の目がいかに見栄え良く(映える=ばえる?)映ることに左右されるかを指摘されます。現代のスマホ文化に象徴されています。この主題は福音に引き継がれていきます。

第二朗読 「使徒パウロのエフェソの教会への手紙」

ここでは主イエスと出会った信徒の皆さんがどのように生活したらよいかを教えてくれています。以前には暗闇であったのに、今は主イエスを知ること

によって、光の子として歩めるようになったのですから、「実を結ばない暗闇の業に加わらないで」生活しなさいとパウロは私たちに勧めています。今の時期は洗礼志願者たちの準備の期間ですから教会は洗礼志願者たちへの勧めを紹介しながら、回心に励む私たち信徒にもそれを思い起こさせています。

福音朗読 「ヨハネによる福音」

今日の福音はイエスが「生まれつき目の見えない人の目を癒され、目が見えるようになった人」の話です。目が見えるということは大変ありがたいことです。しかしそのような恵みに気づかず、余計なものを見て過ごしていることがどんなに多いことか。天文学では天体望遠鏡の発達が多くの発見をしてきました。私たちの肉眼では見えない世界を見ることができるようになりました。最近ではブラックホールの形まで見えるニュースが入ってきました。

でも、色々見えるようになって果たして私たち人間の生活の質、つまり私たちの心は豊かになったのでしょうか。お金に目がくらみ、権力に目がくらみ、物がもっと欲しくなり、隣人の苦しみにはめもくれず、目先の利益や欲に目がくらんでいるのではないか。そのくせ他人の欠点にはいち早く気づく。人間にとって大事なことに目が止められなくて、自分ファースト。それが今や世界中に充満しているようです。私たちは人として生きていくうえで、神の子どもとして生きていくうえで大事なことが目に見えていないのです。

フランシスコ教皇様は、自分に閉じこもろうとする傾向に強く反対するように私たちを励ましておられます。隣人の困った状況が見えるようになった初めて、私の困った状態、つまり私の弱さに気づくのです。

「主よ、隣人の必要に気づけるように、私の目を開いてください。」
アーメン。